〈 書評論文 〉

日中の農村・都市間移動の帰結

見田宗介『まなざしの地獄 ── 尽きなく生きることの社会学』
（河出書房新社、2008年）

林　　梅

1．書の内容を追う

本書は、1960年代高度成長期から70年代までの日本社会を生きたN・Nの生活史分析を軸に置いている。当該書籍のテーマは、「夢見る」都市で「尽きなく存在し」ようとした「少年」N・Nがおかれた「まなざしの地獄」という状態である。つまり、ある時代を生きた一人の人間の総体を規定し、予料するまなざしによって彼が殺人犯へと導かれる過程である。

分析的手法は、見田の表現を借りれば「統計的な事実の実存的意味」と「実存的な諸事実の統計的意味」（p. 72）を駆使したものである。N・Nが集団就職で上京したことがきわめて平均的であったことは、当時の中学校・高校を卒業して東京に流入した少年人口に関する統計資料から明らかにされる。また、このような統計的な事実も使ってN・Nに対しとおりいっぺんの平板な解釈以上の鋭い分析を与えたことこそ、本書の注目すべき点であろう。たとえば、一つの事実に対して、立場の異なる側面から集計された二つの統計を取りいれ、双方の矛盾点から見事に仮説を立ち上げる（pp. 23–26）。最もミクロな対象である実存的な諸事実を統計に還元してその存在の意味を表し（実存的な諸事実の統計的な意味）、また、統計的な事実に属する諸事実の意味を明確にする（統計的事実の実存的意味）ことで、統計と諸事実間の関連性の信憑性を確保しているのである。

本文は主に三つの部分で構成されている。第一部である「風と影跡―空白のアイデンティティ」ではまず、近代資本制の原理によって破壊された共同体としての家郷を執拗に嫌悪し、それが自己嫌悪としてアイデンティティの中枢に居座っているN・Nを描き出す。そのようなN・Nが家郷から脱出する方向性として、〈新しく生きなおすこと〉の希望の場であった都市は、実像よりは〈それであるはずのもの〉として、外部から投影された都市であった（p. 11）。近代における〈都市〉あるいは資本のもとでの安価な労働力としての「金の卵」もまた、階級的な対他存在でしかなく、他者たちのまなざしによって規定されるものである。都市で転職を繰り返すかれらは、対他と対自の間で矛盾として存在するが（p. 22）、見田は客観的指標によって転職と給料、休日制とが相関しないことを見出

し、転々とする離職の主観的な理由がじつは本当には「分かっていない」ことを指摘している（p. 27）。結果、〈理由なき理由〉は、都市の生活における必然性の意識の希薄、存在の偶然性の感覚、関係の不確実性、社会的アイデンティティの不安定による社会的存在感の希薄さという解をみちびく。だがいかに希薄なものであれ、当人の行為は結果的に他者を侵害し、他者からの視線とリアクションを差し向けられることになる。

第二部分の「精神の鯨―階級の実存構造」では、具体的表相性と抽象的な表相性としての対他存在が、執拗にそして確実に都市の人間の存在をその深部から限定するものとして描かれる。このような他者たちのまなざしこそ〈尽きなく存在し〉ようとする人間にとっては地獄であった。本書のタイトルである「まなざしの地獄―他者としての自我」とは、まさにこのことを端的に剔出するものである。

そのような状況のなかで、上京者はまなざしの地獄を逆手にとって、表相性の演技をしてまで自己を都会が形成しようとする人間に仕立てあげようと試みる（pp. 43–46）。このような表相性の演技をとおしても乗り越えたいと思う都市階級の実存構造のひとつが、具体的な社会の中で、人々の誇りを挫き未来を解体し、「考える精神」を奪い、生活のすみずみを「貧乏くさく」刻印し、人と人との関係を解体しさり、感情を涸渇せしめて、人の存在そのものを一つの欠如として指定（p. 52）して、貧困を貧困以上のものにし、ひいては殺人という結果を招く。

もうひとつが、旧来の「ブルジョア」と「プロレタリア」という階級分類では把握しきれない階級の実存構造である。つまり、高度成長期において「大学を卒業し、企業に就職する」という「履歴書が要る」コースと、このコースに乗れなかったプチブルの人々による零細な自営業者のような「履歴書が要らない」コースとがある。しかし、多くの地方出身者でN・Nのような無数の人々はこの二つのコースのいずれにも乗れないまま疎外されていた。どれだけ「自由な」転職を繰り返すにしても、企業就職はもちろん零細自営業者になるには、めったに超えられない障壁があり、「不可視のゲットー」のうちに閉じ込められている。このような不可視の鉄条網としての階級および階層の構造の存在こそが乗り越えようとする試みにつきまとい、その存在のうちに連れ戻すのである（p. 56）。

最後の第三部「原罪の鎖―現代社会と人間」では、他者たちの視線による〈まなざしの地獄〉が、成長する少年たちの精神を形成していく機序が描かれる。それには、社会のシステムが要求する役割の演技へと自己を同化してゆくという第1の疎外と、この疎外を突破しようとする反抗の形態を捕捉してしまう第2の疎外とがある。これこそが見田のいう自己の内なる他者でありながら、どうしようもなく自己自身である〈自己としての憂鬱〉である。

多くの青少年たちを招きいれ締め出す過程で、N・Nのような「不消化なもの」を生み出す背景には、社会にめぐらされている「鎖」のような関係ゆえに、やむをえず「許されざる者」になる「子どもをすてる」選択をしたN・Nの母親のような存在がいる。原罪性とは、われわれがこの歴史的社会の中で、見捨ててきたものすべてのまなざしの現在性として、われわれの生きる社会の構造そのものに内在する地獄で（p. 73）、それこそが「まなざしの地獄」である。

「まなざしの地獄」に対する時代的背景を明らかにすべく論述された「新しい望郷の歌」（併録）は、近代化とともに変容した農村における自然秩序の解体と大家族制の実質的な崩壊の最後の局面の現実を描く。家郷解体は都市において生活する諸個人にとってはいっそう耐えがたい苦悩として意識されるにいたる。農村から都市に向かう出稼ぎは、社会構造・生活構造・意識構造そのものの基盤解体で、自らの否定に向う出稼ぎである。家郷はもはや、「いざという時の生活の保証」として、また

「逃げ場」としての意義を失うことになる。このような家郷喪失の代償として迎え入れられたのが「家庭化時代」である。

2．新しい発想とアプローチ

社会構造の実存的な意味を一つの特殊事例において代表したN・Nという人間をとらえ「社会」の原的な構造と非条理を映し出した「まなざしの地獄」は、見田宗介があとがきに記しているように、私たちに新しい思考とイメージを生成し展開させてくれるものである。それは、2008年12月31日の見田本人の談話による「リアリティーに餓える人々」という記事（朝日新聞）でもよくわかる。この記事の中で彼は、1968年の上述の事件（当時19歳、N・N）と2008年の秋葉原殺傷事件（当時25歳、K）を比較して、「未来」と「まなざし」とが二つの時代で見事に異なることを述べている。

具体的にいうと、N・NとKは不同な時代を生きた若者であるが、どちらも時代の最低辺を生きていてその社会において殺人を犯したことは共通している。しかし、その犯行の背後にある社会的病理は正反対のものである。N・Nは未来に対する憧憬が犯行につながり、背後には逃れようとあがいても抜け出せない「まなざしの地獄」があった。それに対して、Kには未来に対する希望はなく、犯行の背後にあるのは誰からも必要とされない「まなざし」の不在の地獄であり、注目されたいということが犯行動機に結び付いている。このように、1973年の「まなざしの地獄」を2008年に再出版したことは「バーチャルな時代」の「古典的な現実の飢え」という日本の現在の病理を明らかにするうえで、有意義な企画であろう。

ここで、N・NとKは異なる時代の病理の影響を受けたにせよ、何故にそれぞれ同時代を経験している多くの人々とは対照的に、殺人という極端な行動をとってしまったのかという疑問が浮かぶ。殺人に走る動機に共感を覚える人々がいるにしても、人々には理性があって、「まなざし」の有無に左右されるよりもっと大切な生きる理由によって行動を制御できるはずである。にもかかわらず、特殊事例をもって普遍的な社会病理を浮き彫りにする根拠はどこにあるのか。その疑問に答えるものとして、「まなざしの地獄」を含めて見田が1979年に出版した『現代社会の社会意識』に収録している「価値空間と行動決定」という数理社会学的方法論による論稿に立ち返ることができる。

見田本人はこの論文を「乾燥した」方法論だと自評しているが、「潤い」あふれる「まなざしの地獄」はこの論文の一つの展開といえるものである。この論文で見田は、複数の主体からなる社会集団と個人の行動選択には、行動の決定をなしうるような価値の基準が一般的に存在しえないことを明確にした。そのうえで、主体にとっての価値空間を確定し、その空間のなかで、主体の行動あるいは状態が一定の界面によって限界づけられる半空間をなすことを指摘した。このような価値空間における二つの限界面つまり、「一つの狂気を自己の狂気として」選ぶことと「非条理自体を人間の真理として一切の悲の中を生きる」ことであると論証し、「世の中を生きる我々の生き方の選択は、この両極端かまたはそのさまざまな混合形態であること」を明確にしたのである（見田 1979：p. 240）。「まなざしの地獄」は、まさに価値空間の「一つの狂気を自分の狂気として」生きて一つの極端において生き方を選んだN・Nという特殊事例が実存的社会構造の病理を論証たらしめる根拠となるわけである。

しかし、同じ実存的社会構造の「まなざしの地獄」にさらされた大多数の人々が殺人という狂気を生きてないこともまた実存的事実として否定できないことである。現在でも権力構造によって格差づ

けされた都市と農村の間にある差別構造のなかで生きる人は決して少なくない。農村から大都市への移動、階級的差別、非条理な「まなざし」を含む苦痛の蔓延という事態は、ちょっと外に目を転ずれば、いまでも世界中のどこでもみられる。その一つが現代中国の農民工である。

3．中国の農村・都市間移動から見る「まなざし」

農民工とは、「戸籍を農村にのこしながら、主に非農業に従事する者をさしていう。農閑期に外出して出稼ぎをするものの、農繁期になると農業もやる、流動性の高いものもいれば、長年都市部で働き、産業労働者の重要な構成部分をなすものもいる」（厳 2007：p. 67）。農民工の社会構造における差別的待遇は、中国の改革開放以前の計画経済の中ですでに根付いていたものである。

差別意識を反映、助長した代表的な制度が「戸籍制度」であった。「戸籍制度」とは、主に1958年の『中華人民共和国戸籍登記条例』のことで、農民の都市への流入と都市における人口流動を厳しく制限し、農村と都市を分離させた制度のことをいう。この制度によって封鎖あるいは半封鎖状態にあった50年代から70年代までの中国農民にとって都市とは、現実的な夢を見る場というよりは物理的に足を踏み入れることさえ許されなかった「聖地」であった。改革開放以後、1980年ごろからこのような封鎖状態が半開放あるいは開放になったことで移動の「自由」がもたらされた。また、土地の請負制により農村において個別に農地の利用権が与えられ土地が分配された。しかし、日本の平均的農家が一人当たり15ムー[1]以上の土地を経営するのに対して、一人当たり1.59ムーの経営面積しか与えられなかったことからも、この土地分配は充分ではなかったことが明らかだろう。

このような少ない農地で生計を維持することは当然困難で、ほかの「生計道」は都市に出稼ぎにいくことしかない。N・N が都市に出た頃、日本の都市がまがりなりにも「金の卵」として青少年たちを都市に招き入れたのに対して、中国の農民工ははじめから歓迎されない対象であり、排除の対象であった。都市の公然たる「差別的なまなざし」だけでなく「暴力的」な締め出しが農民工を迎えたといえる。それにも関わらず、2004年には約２億人の農民工が都市で働いたことを考えると、中国の現代化のなかで農民工が重要な労働力であったことは間違いない。個人による土地の請負制によって、「自由」にされた農民ははじめから都市に流れ込まずには生計維持が困難な状況であったし、都市で暴力的に排除されてもなお「自由意志」で農民工にならざるを得ない運命にあったわけである。都市で受ける「差別的まなざし」も、「暴力」も、「自由意思」であるがゆえに、そうした不平等の一切は自己責任に帰せられる。

このような状況で目指した都市の生活はまさに困難との闘いである。陳冠任らはその困難を６つに類別し、低賃金（未払い給料）、劣悪な労働環境と生活環境、長時間労働、差別視、寂しさを挙げる（陳・肖 2007：pp. 153-167）。これらの一角を占める差別視という「まなざし」が農民工の心身に影響を与えたことは想像に難くない。政府は2005年に、学校規則である『北京中小学生日常行為規範解読』に「『色眼鏡』で『外地人』（主に農民工）を見て差別したり、辱めたりすること、彼／彼女らの外見をあざ笑うこと、悪ふざけをしてはいけない」という項目を新たに加えた。これは大人の社会での農民工に対する「まなざし」の問題が子供たちに与える影響を、政府がいかに深刻に捉えていたかを端的に表すものであった。

1　ムーとは、中国における土地面積単位で、一ムーは667平方メートルに値する。

現代中国都市における「まなざし」は、「農民」という言葉自体に差別性を与え、制度的・社会的な二重の鉄条網として階級・階層の構造を作り、「弱勢群体」としての劣等公民を作り出したのである。統計上にあらわれる可視的要素において、移住、就労条件、居住環境、子供の教育、医療、年金などが都市の市民と同様の権利を享受できることは保障されてない。2000年末の農業部[2]の統計によると、都市労働者の平均収入は12422元（約18万円）であったことに対して、農民工の年間平均収入は5597元（約８万円）と半分以下であった（趙・孫・朱 2005：p. 78）。こうした構造的格差に加え、統計上に現れない不可視的要素においても、「下品である」「きたない」、「教養がない」「乱暴である」などの差別的まなざしがあり、農民工を二重の差別に陥れていた。

このように見ると、農民工の苦痛は差別視に限らずはるかに深刻なものであることがわかる。にも関わらず多くの人々は都市を目指しているし、決して「一つの狂気を自己の狂気」という行動選択もしない。都市において家族の生計維持に必要な収入を得るために、農民工は苦痛に耐えている。2004年におこなった都市に入った農民の動機に関するアンケート調査によると、172部の有効調査紙で47％の回答が「家庭の生活費を多少補うだけで、長期にわたって都市にいるつもりがない」と答えており、「都市に立脚し、都市の市民になる」と答えたのはわずか10％にすぎないことがわかっている。統計によると、90％の農民工が節約生活で都市における消費をひかえ、家郷の家族に送金をしている（趙・孫・朱 2005：pp. 75–76）という。

都市で農民工が受ける差別と収入獲得という目的とは、単純な条件と結果ではないことは明らかだが、農民工たちは収入のために差別を含む苦痛に耐えているということは言えるだろう。しかし、これは決して彼らが「非条理自体を人間の真理として一切の悲の中を生きる」ということではない。生まれながら「戸籍制度」によって農民という身分に固定され、透明であるが頑丈な壁によって仕切られていた農村からは、都市は夢のような別世界であったが、入り込める場所はもちろん隙間すらもなかった。都市世界における自己の生活に対しては具体的なイメージも湧きようもない。自己が住んでいる世界は、常に自らの周りが全てであった。みんな同じ様な境遇で、同じように貧困を共有し、都市と比較して格差を考えることなど「わきまえをしらない」ことであった。「遠い」都市における優遇は、自らと関係があるのかないのかさえ明確でない存在であった。

改革開放以後、空間的移動が可能となったことは多くの人々に都市の存在を再確認させ、自己の出来事の範疇へと都市的世界を招きよせた。この接触によって、都市は差別という実感を身近なものとして、農民工に「身にしみる経験」を与えたのである。農民工の都市における「夢」は、経済的な要求に限らずさらに前進をみせた。経済収入との引き換えでは決して償えない心身を損なう差別に対する制度的・社会的抵抗であった。

近年の中央人民代表大会における農民工代表の参加と発言権の付与、多くの研究者とメディアの注目などにより、少しずつではあるが農民工の権利奪回の兆しが見えつつある。今年２月の中国Yahoo 不定期の社会議論板で、ある小さな出来事が議論された。それは、北京市で起きた公共バスの農民工乗車拒否事件だった。何人かの農民工が汚れた作業服を着たまま乗車したことで、車内の他の市民による抗議が起きた。運転手は農民工に服を脱ぐかバスから降りるかすることを命じた。これに対して、汚い服のまま乗車したことは悪かったが運転手の態度は明らかに軽蔑的なものであったと農民工らが訴えた。運転手は農民工の被害妄想だとし、他の乗客に迷惑だったのでそうするしかな

2　農業と農村経済発展を主に管理する国務院を構成する部門で、日本の農林水産省に当たる。

かったと弁明した。議論の中で、多くの市民から寄せられた意見は、運転手の言い分もまったくの理不尽ではないし、農民工も被害者であるというものだった。そしてそれらの意見の多くは、移動中に新しい服に着替えるように指導していない職業訓練センターと新しい服を配布してない雇い主に責任があるとしたのである。この事例は、都市の人々の差別ないし差別問題に対する新たな認識のあらわれたものとして意義深い。都市に進出した農民工が自らに向けられたまなざしやむき出しの暴力的処遇に対する不当さを都市に訴えかけ、それが都市人の共感を呼ぶという結果に結びついたのである。

このように、農民工は都市の最底辺においてもなお「一つの狂気」でもなく、「一切の悲」でもない、その間を生き抜こうとしている。見田は、「一つの狂気」を生きたN・Nの特殊事例から社会構造に秘められている「まなざしの地獄」という病理を論証した。それに対して、差別視を含む苦痛を与える社会構造から見た大多数の人々の行動選択は、「一つの狂気」と「一切の悲」という両極の間のいずこかである。都市における「まなざし」や差別、暴力的排除という負の外在的な力と経済収益の獲得への正の内在的エネルギーは、行動選択において単純に足し算、引き算できるものではない。人々は非条理な苦痛を受け止めるだけでなく、その非条理の改善に努めることによって、社会的な価値の変革にコミットすることがわかる。こうした外圧と内的エネルギーの拮抗するなかで、人びとは葛藤し生存するための選択をなす。その意味において「まなざしの地獄」は、「一つの狂気を自己の狂気として」選んだ行動決定が価値空間の限界面を表した一つの形態であるといえるのではないか。

参考文献

見田宗介、1979『現代社会の社会意識』、弘文堂。
陳冠任・肖万春編、2007『人間正道：中国農民記録』、中国北京団結出版社。
厳善平、2007「農民工と農民工政策の変遷」、愛知大学現代中国会、『中国21』（Vol 26）、風媒社。
ハーヴェイ、デヴィッド、（渡辺治ほか訳）2007『新自由主義―その歴史的展開と現在』、作品社。
趙俊超・孫慧峰・朱喜、2005『農民問題新探』、中国発展出版社。

（りん・めい　大学院研究員）